慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黎明期の日本社会心理学 : (元良勇次郎と社会心理学の萌芽)
Sub Title	The dawning of social psychology in Japan
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1968
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.8 (1968.) ,p.1- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000008-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黎明期の日本社会心理学

(元良勇次郎と社会心理学の萠芽)

The Dawning of Social Psychology in Japan

佐　原　六　郎

Rokuro Sahara

1. 元良勇次郎とその時代の心理学界

日本の社会学及び心理学の起原については既に若干の学史的研究が遂げられ，大体その輪郭も明かにされているが，この二つの学問に密接な関係をもつ[1]社会心理学の萠芽に関しては未だ定説と云えるほどのものは立てられていないように思われる。そこで私はわが国社会心理学発足の第一歩を元良勇次郎著「心理学」(1980，明治23，金港堂発行）に求め，そのうちに散見される元良の社会心理学的見解とでも称しうるものを明かにしてみようと思う。元良勇次郎の履歴，著作目録，その人物と学問などについては，彼の逝去の翌年，その同僚，友人，門弟達の執筆投稿した「元良博士と現代の心理学」(故元良勇次郎追悼学術講演会編，1914，弘道館発行）に詳述されているので，それを参照しつつ，簡単に触れることとする。

元良は1858年（安政5）摂津国三田に生れ，1875年から約3年半，同志社英語学校に在学，普通学を修業，1883年渡米，ボストン大学に入り2年間哲学を修めた後ジョーンズ・ホプキンズ大学に転じ，3年間心理学を研究，1888年同大学の心理学科，哲学及び社会学科を卒業Ph. D. の学位を受ける。同年帰朝，東京文科大学で一年間精神物理学の講師を勤め，1890年同大学教授となり，心理学，倫理学，論理学などの授業を担当，1905年ローマで開催の万国心理学会議に出席。翌年帰朝，1912年12月13日逝去，行年54才。彼は逝去の年まで24年間に亘り東京大学に勤務，わが国心理学界の開拓者として斯学の発展に大きな貢献をなした。その優れた人格の故に，彼は創見に富む学者，学生を激励せる教授，熱心な会長，忠実な会員，信義ある友人，慈悲深い先進などと評されて各方面の人々から尊敬され，後人の儀表として仰がれた。なお彼がジョーンズ・ホプキンズ大学でG. スタンリ・ホール（1844-1924）に師事して実験心理学を修め，1888年 American Journal of Psychology の創刊第1号に「圧の漸時的変化に対する皮膚の感受性」(Dermal Sensitiveness to Gradual Pressure Changes) という論文を発表して学界の注目を惹いたことはわが国心理学史上永く記憶さるべきである。

元良がわが国に近代的心理学を導入し，その先駆者として活躍していた時代の日本及び世界の心理学動向については前述の「元良博士と現代の心理学」のうちに次の二つの記事があり，しかもそれは明治時代の心理学の状況をよく伝えているので，ここにそのまま引用再記しておく。まず[2]「明治年間心理学の発達」と題する記事によると「西周氏その致知啓蒙（明治7）に性理学（サイコロジー）の名で学界に紹介，11年ヘブン氏心意哲学の訳本心理学の出版が斯学の先駆。当時，東大，外山正一氏講義，参考書はベイン氏，カーペンター氏，スペンサー氏のもの。15年井上哲次郎氏ベイン氏の訳出版。21年元良勇次郎氏東大に精神物理学講義，22年実験器初購入。23年心理学出版。31年ヴント氏心理学概論，中島泰造氏と訳。以後益々原理の研究に深入。34年東大に松本亦太郎氏独（ドイツ）風実験心理学鼓吹，36年実験場出来，39年福来友吉氏変態心理開講，ジェームズ風唱道，同年松本氏新京大へ赴任，翌年同実験場落成，後野上俊夫氏同所に応用心理，桑田芳蔵氏東大に民族心理学開講，尚八高中，四高師，諸私大，

各講義堂々。学会では東に心理学会，心理学研究会，西に心理研究会。雑誌では心理研究，哲学雑誌も貢献多大。題目，一般は勿論，個性，思考，信念，記憶，児・動・植心，色，意志，律動，注意，情緒，人格，誤謬など」と。もちろんこれは東京大学を中心として書かれた記事であり，当時の高等中学，高等師範学校，私立大学の心理学についてはただその学校を指摘しただけであるが，その頃としてはこれも止むを得なかったのであろう。

次に[3]「欧米心理学現況」と題する記事も当時の心理学界の模様を要領よく概観したものである。「ヴント教授，故ジェームズ教授，故元良教授はわが心理学に影響を及ぼした世界の三大家であったが，今や斯界の北辰としてヴント教授のみが八十才嬰鑠，ライプチッヒ大学に講義，大著生理的心理学原論，民族心理学は学界を風靡。まず氏と比ぶはミュンヘンにいた心理学楷梯の著者リップス氏と米国ハーバードの心理学原論の著者ミュンスターベルヒ氏とであろう。尚斯界の重鎮はドイツではベルリンのシュターン氏，ミュンヘンのキュルペ氏，ウュルツブルグのマルベ氏，マールブルヒのナトルプ氏，ハンブルヒのモイマン氏，デンマルクのヘフディング氏，レーマン氏，オーストリアでヨードル氏，フランスでリボー氏，イギリスでケンブリッジのヲード氏は巍然たる大家，外にマイヤース氏，マクジュガル氏，米国でコーネルの実験心理学，新心理学の著者ティチナー氏はじめサンフォード，カテル，ソーンダイク，エンゼル，サディス，ジャット，ボールドウィンの諸氏。純理方面では思考に続いて意識，内省の研究，応用方面では範類学(テイペンレーレ)や精神分析。構成心理から機能心理へ，普通心理から差異心理へ，個人心理から民族乃至社会心理へと。雑誌などは哲学問題の心理的研究の殖えた事，これらが現今斯学の傾向であろう」と。以上二つの記事は元良在世当時の内外心理学の状況を伝えたものであるが，私のはじめて社会学と共に心理学の勉強を始めた頃，そのまま以上の動向が続いていたのであって，それを回想するときまことに興味深く感ぜられる。けれどもまたそれから約50年を経過した現今の心理学とこれを比べると，さすがに著しい変動のあることを痛感せざるを得ない。

元良ははじめ(1)精神の本源を力的存在と見，これを自然力と同列に置こうとし，(2)精神の一切現象を因果律と勢力保存律の法則によって説明しようとし，(3)精神力と自然力との間には交互作用があるという交互作用論をとって，これを実験的に解明しようとした。けれどもやがて彼は哲学問題の心理学的研究に深い関心を示すようになった。このことは彼の門弟の一人である福来友吉の書いた次の文章によっても明らかに知られる。[4]「(元良)先生は職務としては心理学の講義を担当して居られたけれども，先生の心内に伏在し居りて常に働きたる意向は通常の意味に於ける心理学を研究することよりも，寧ろ精神と物質との関係に対する哲学的問題を解決せんとすることであったように思う。先生の立場より見れば，斯る問題の解決に基きたる心理学にあらざれば真正なる科学としての心理学でないと言うのであったらしいが，多数の心理学者は斯る問題を哲学者に委せて，自身は之に関係せざるを常とするものである。故に多数心理学者の立場より見れば，先生は心理学者として現はれたる心理学者と言はんよりは，寧ろ心理学者として現はれたる哲学者である」と。また福来によると[5]「先生の哲学的思想の発達は次の数言に節約することができる。先生は因果律や勢力保存律の如き純粋なる物理的力学的思想を以て精神活動を解決せんとする意向を以て発足し，後に目的観念力と知的作用なる精神的思想を新に取り入れて，これによりて循環活動論と心元論となる学説に到達されたのである」と。元良が，ここに指摘されたように，ミュンスターベルヒのいわゆる因果的心理学から出発しながら，後に目的論的心理学へと転じたことは，やはり彼の哲学者としての半面をよく現わしたものと見ることができると思う。

2. 日本社会心理学の出発

元良が在米中心理学と共に社会学を修めたことは彼の心理学説のうちに散見される家族，種族，民族，国民その他の社会関係の論述にその影響を与えたもののように思われる。また東京大学に於ける彼の心理学講義の際にも，部分的にではあるが，今日の目からみて社会心理学的見解と云えるような論述があった。例えば1895年度の講義を筆記した姉崎正治はその目次の第4編第4章に[6]「社会心理学」の項目のあったことを示した。またそれより後1910年度には目次の第18章で[7]「社会意識」の項目のあったことが佐久間鼎の筆記によって明らかに知られる。これによっても明治の後半期にわが国でも個人心理から民族乃至社会心理への動向の少しは存在したことが窺われる。けれども社会心理学は今でこそ安定した学名として世界共通に認められるに至っているが，元良の在米当時及びそれ以後しばらくの間，この学問は未だ揺籃期を脱し得ず，またその学名も安定していなかった。例えばフランスでは psychologie sociale, socio-psychologie, psychologie inter-mentale, psychologie inter-

spirituelle など，ドイツではラーツァルスとシュタインタール以来の Völkerpsychologie の外に Sozialpsychologie, Psychosoziologie, Soziopsychologie など，また英米では sociology in its psychological aspect, psychology of society, psychology of human society, social psychology など，使用者はそれぞれ特殊の意味を附与してはいるが，実際には明確に区別しがたい幾つかの名称が併用されていた。他方また社会心理学という学名を表題に掲げた最初の単行本は，私の知る限り，恐らく G. Tarde, Étude de psychologie sociale (1898) であり，英語では E. A. Ross, Social Psychology (1908) と W. McDougall, An Introduction to Social Psychology (1908) であった。これらの事情を考えると元良が1895年に，部分的にではあるが，既に社会心理学という項目を含む心理学講義を行ったのは，当時の日本としてまことに注目に価するものであった。後に心理学者としては元良門下の速水滉が現代之心理学(1914)のうちで，また元良の高弟で後継者となった松本亦太郎が心理学講話(1923)に於て，それぞれ社会心理学について論述を発表し，更に同じく東大の教授となった桑田芳蔵がヴントの民族心理学(1924)をはじめ社会心理学に関する著述をなして，わが国社会心理学の発展に貢献したのも，これらの学者と元良との師弟関係を考えるとき，決して偶然ではなかったというべきである。他方わが国の社会学者のうちにも直接元良の教導を受けたものがあった。「元良博士と現代の心理学」の中で「学界の明星堕つ」と題する追悼文を書いた樋口秀雄もその一人で，彼が「社会学小史」(1911) というわが国最初のまとまった単行本としての社会学史の著者であることは周知のことであるが，更に彼はその著「社会学10回講義」(1913)の中で第7講社会意識，第10講第3節社会と心理的理法を講じたことも注目すべきである。また樋口と同様に心理学的社会学者であり，元良の門下生であった徳谷豊之助がロッスやマクデュガルよりも2年も早く社会心理学(1906)という本邦最初の斯学の著書を上梓したことも忘れてはならない。徳谷はこの著書の例言のなかで[8]「本邦に於て社会心理学を公にするは恐くば本書を以て嚆矢となさん，然れども由来斯学の前途は猶遼遠なるものあるを以て余は有力なる学者が続々斯学に関する著書を公にせんことを希望してやまざる也」と述べている。これらの事実を知るならばわが国社会心理学の出発が欧米諸国のそれに比べて，必ずしも遅れたものでないことがよくわかる筈である。

3. 元良に於ける社会心理学の萌芽

元良はその著心理学(1890)の中で心理学の研究問題とは何ぞやと題して次の如き見解を示した。[9]「心理学は人を研究するものなり，それ人は身体と精神とを有するものにして，精神は恰も海中の孤島の如く無意識なる物質世界の大海により囲繞され，各自の精神は互に孤立するものなれば，その作用は独り心中に現はるるのみにして直接にその感覚を他人に知らしむる能はず，ただ外面に現はるる徴号に依りてその一部を知らしむるのみ。

おもひやるこころは海を渡れども
　　ふみしなければ知らずやあるらん　(紀貫之)

斯の如く文（徴号の一種）によらざれば意を通ずる能はざるなり。されば顔色の如何を見てその人の喜怒哀楽を知るは直接に精神の有様を知りたるに非ずして，ただ徴号と推理によりて内界の心像を察知せるのみ，これ個人の精神界を察知することなり。もしまた単に身体のみを他人より見るときは，人はただ一の動物たるに過ぎずして，外物の刺激を受け之に反動するもののみ。故に身体と精神とは互に密着の関係を有して相分離すべからずと雖も，而も説明の易からんため，今仮りに二者を区別して論ぜんとす」と述べて心身両者を分けて説明し，更に次の如く論じた。[10]「前述せる所は精神と身体とを仮りに区分して見たるものなりと雖も，その実斯く区別せらるるものにあらざれば，一歩を進めて人の全体に於ける活動の有様を述べざるを得ず。(中略) 心理学に密着の関係を存する左の点につきて大意を陳述せんとす。即ち五感，脳髄，意識，及び筋骨これなり。それ身体は精神の活動を助くる器械なりとは普く称する所なりと雖も，此説たる一方に偏する嫌なき能はず，他の一方より観察すれば，精神なるものはまた身体の活動を助くるものなりと言ふも不可なければなり。換言すれば精神と身体とは相須って始めて完全なるものなり。故に精神と身体とは如何に相助け合うやの理を知るは人の人たる所以を知るものと言ふべし」と。以上の如く論じた元良は心理学に於ける身体研究，特に五感と脳髄の研究に重点を置きつつ精神の活動を明らかにしようとした。ここでも実験心理学者としての彼の態度がよく窺はれる。

次に元良は心理学と他の学問との関係について論及したが，その見解の大要を述べてみよう。彼はその著心理学の総論の中に[11]原理と題する項目を設け，(1) 表象と印象との関係，(2) 表象及び意識，(3) 表象は力を有す，(4) 霊魂及び能力，(5) 表象と能力との比較，(6) 精神と意識及び表象の関係，(7) 意識，(8) 表象と観念との関係，

(9) 観念と感覚との関係，(10) 観念と知覚との関係，(11) 観念と心像との関係，(12) 概念と知覚及び心像との関係，(13) 智性，(14) 情緒，(15) 意志，の15の問題について要約的説明を加えた後 (12)「心理学と諸学との関係」と題して次の如く説いた。「心理学と哲学とは大に異るものなり。心理学は人を研究する学にして，哲学は万有，心霊及び人間の存在せる根元を研究する奥妙の学なり。然りと雖も是等二学屢々同一視されたるはその理なきに非ず。心理学研究の方法明らかならざるときは，世人心理を研究するに外界の事実を利用することなく，自己の想像をのみ重なる基本とせり。故に世人は哲学と同じく心理学をして形而上の学に位せしめ，是等二学を同一類のものと見做すに至りたるなり。然れども心理学は全く形而上のものに非ず，寧ろ形而上の学と形而下の学との間に跨りて二者の関係を定むるものと云ふべし。心理学と科学とは密なる関係あり。仏国の碩学コント氏は総ての学を大別して六とす。之を簡単より複雑に移るの順序に数ふれば即ち数学，星学，物理学，化学，生物学，社会学是れなり。而して氏は心理学を生物学の一部としたり。故に氏の説によれば心理学は生物学と直接の関係を有し，該学中最も高尚なるものなり。氏は心理学と哲学とは殆ど関係なきが如く説けり。是れ素より少しく偏するの傾きありと雖も，心理学と科学との関係に至りては氏の解説明白にして著者の大に感服する所なり。心理学は生物学中最も複雑なりと雖も，社会学に比すれば稍々簡単なるものなり。それ一個人は社会を組織する元素なり。されば元素の性質を知らずして全体の組織を了解する能はざるや明らかなり。世人心理学を知らずして社会の運動を研究し，或はこれを改良する能はず。社会の組織は人間の性質に適せざる可からず，然らざれば如何にして良好なる社会を組織するの理あらんや。比喩を以てこれを説明せんに，顔の表出はその精神の有様に関す。内に快楽あれば自ら顔色爽快なり。これに反して内に苦痛あるときは外貌も亦自らこれに準ず。顔の容貌は精神の有様によりて変ず。社会活動も亦これを組織する一個人の精神によりて大に変ずるものなり。故に社会の組織はその中にある一個人の精神の表出するものなり。社会現象と精神現象と密に相関する斯くの如し」と。この見解のうちに見られる元良の個人と社会との関係についての考え方は，意識を論じた彼の次の文章のうちにも窺われる。(13)「意識の物質に於ける関係は影と本体との関係の如きものに非ず，影は本体の形を現はすのみにて自己の力を有するものに非ず，意識は物質の活動より起る所の表象の結合に基すると雖も，又自己に特有なる力ありて表象の活動を司どること，なお個人の結合より成れる国家がまた個人の動作を司どるが如し。その表象の作用によりて身体の動作も制するを得るものなり」と。ここでも個人と国家（社会）との関係の問題が元良の念頭を去らず，彼の意識論のうちにまで滲み出てきたことがよくわかる。

(14)G. W. オールポートも説いたように19世紀の社会心理学者の多くは人の社会的行動の根本要因を何か一つのものに求める一元的説明を採用した。そして社会的行動の謎を解く単純で効果的な要因として広く採用されたもののうちには快楽と苦痛，エゴイズム，同情，群居性，模倣，暗示などが挙げられる。元良もまたこのような一元的解決策に無関心ではなかったことは彼の前掲著書の第9章苦楽の学理のうちで示した苦楽の感と同情とに関する見解を読めばすぐ明らかになる。彼はまず苦と楽との関係を論じて次の如く主張した。(15)「抑も苦楽は世間にありて種々様々の現象を生ずること，恰も水に寒暖あり，宇宙に明暗あり，陰陽あり，積極消極ありて相俟って互にその存在を保つものなるが如し。然れども尚これを精密に考ふるに水には寒暖あるに非ず，熱の多量なるを暖と云ひ，熱の少量なるを寒と云ふ。又明暗もこれと同じく宇宙に明暗なるもの存在するに非ず，光の多量なるを明と云ひ，光の少量なるを暗と云ふ。(中略) されば精神中には苦楽なる二原素の存在するものなるや，或は一原素の存在するものなるや，而してその一原素は苦痛なるや，はた快楽なるや，或は苦痛にも非らず，また快楽にも非らざる一種特別のものなるや」と疑問を提出し，まずソクラテス，プラトーン，アリストテレス，滝沢馬琴，ハミルトン，スペンサーなどの快苦に関する説を検討し，最後に結論として自説を次の如く示した。(16)「右に云へるは苦楽の学理について哲学者の考ふるものの大意にして，これを概して云へばソクラテスを除けば皆楽天主義なり。蓋しその説，快楽を天然法と同一なりとすればなり。その他の細論は哲学の範囲に渉るものなれば，ここで論ぜず，今少しく著者の意を述べんとす。それ人の精神活動は繁雑なるものにして，これを一概に論ずるは甚だ難きことなり。抑も快楽に種々あり，苦痛にも亦種々あり。(中略) また甲の苦痛と思ふこと乙の快楽となり，甲の快楽と思ふこと乙の苦痛となることあり，ハミルトン，スペンサーの如きは空中に楼閣を画き，これを快楽と論ずるなるが如し。蓋し彼等のいわゆる快楽とは何の種類の快楽を指して云ふものなるや。快楽の中にその種類を分ち，ハミルトン，スペンサーの所謂快楽と，然らざる快楽との区別をなさざるを得ず。斯

の如き漠然たる論の如きは著者の解し能はざる所なり。著者は快楽と苦痛は精神と身体との調，不調に由るものなりと信ず。それ人には種々の情慾，様々の習慣あるものなれば，その各快楽に任せてこれを満足せしむること能はず，もしこれを満足せしめんとするときは身体を害すること屢々これあるなり。(中略) 故に著者の考ふる所によれば，快楽と苦痛は決して心身活動の調，不調を知るの標準となる能はず，心身活動の調，不調を定むるには他の標準たるものなかる可らず。これは如何なる標準なるや。広き経験に基きたる知識，即ちこれなり。この標準に照らして快楽を限り，また苦痛と雖も甘んじてこれを受くべきなり。苦楽の哲理を考ふるは甚だ爽快にして，且つ大切なることなりと雖も，臆断を以てこれを定むるは古人にありては或は為すべきも，今日の心理学者に於て許さざる所なり」と。このような主張に基いて元良は苦楽と感覚との関係を実験心理学的に論じ，更に音楽，絵画，リズム，笑についての自説を述べて愛情の問題に論及した。

元良によると愛情とは人と人との間に発する一種の感情であって，快楽の原因となることも，また悲哀を生じさせることもある。愛情には両性，朋友，君臣の夫々の間，その他いろいろの場合に生ずるものがあり，また哀れむべきものを見て憐憫という一種の感情を起させることもある。また一個人が社会全体に対して発する感情があって，これを愛国心という。愛情はこれを惹き起させる対象の異るに応じて異種の愛情となるが，いづれの愛情にも同情，欽仰及び固着の三要素のうちの幾つかが働くものだとしてこの三要素について元良は詳論した。このうちの同情は特にアダム・スミス以来スペンサー，リボーその他の学者によっても人の行動の社会的動機として採り上げられたが，元良もこれを重視した。彼によると同情は[17]「他人の感情の外に現はるるを見て自身の精神中にこれと同様なる感情の発するを云ふ。故に他人の悦びを見れば自ら快楽を覚え，他人の苦痛をみれば自ら不愉快を感ずるなり。ここに於て私慾心始めて他愛心と結合して社会的動物たるを得せしむるものなり。比喩を以てこれを云へば，ここに三個の小さき円筒あり，その大きさ一様にして各直立す。而してこれに水を注入するに，その分量一様ならず，甲は深さ二尺，乙は三尺，丙は四尺なり。然るに今細き管を以て彼の甲乙丙の底を通ずるときは，筒底平均して各三尺の高さとなる。その後は甲に水をそそぐときは乙丙の水も同時に増加して，三筒の水量必ず一様ならざるべからず。人の精神中にある同情の感はかの三筒の底を繋ぎたる細き管の如し。私利私慾を満足せしめんとする人と雖も，わが子弟の非常に困難し居るを見るときはこれを見捨て置き，ただ自己一身の安楽を以て快楽とする如き人はあらず，通常の人はその愛する兄弟及び子孫の困難を見るに忍びず，自己の快楽を幾分か犠牲にして以て子弟の困難を救はんとするは，かの同情の然らしむる所なり」と。しかし元良はまた次の如き場合のあることを示した。即ち一方から考えると，人は殆ど同情なきもののようであって，開化の進歩するに従て貧富の別が益々甚しくなり，もし人間自然の情にまかせて，少しも制限を加えないと，富者は奢りを極めて栄耀栄華，殆ど至らざるところのない有様となり，しかもその隣りに住む貧者は日夜心身を労し，やっと命をつなぐだけが勢一杯で，一つの快楽ももたないばかりか，富者のために強迫される有様である。このような場合富者と貧者の間には同情がないものと見られる。かように考えた元良は更に同情の範囲を論じ，社会には同情を以て連合する家族があり，また無情の競争者としての富人と貧人との別があって，両極端をなすが，元来同情にも種々様々の差があり，同情の強く行われる範囲は甚だ狭く，些細の同情は広い範囲に行われるものだと説いた。そして彼は同情についての次の三つの制限を認めた。(a) 同情は概して自己と同等又は以下の人々に対して発せられることが多い，(b) 同情は自己の敵に対して発せられるものでない，(c) 同情は全く無関係の人々の間に発せられるものではない。更に元良は同情を強化する条件として次の六つを挙げた。(1) 相手をよく知り，親密であること，(2) 相手と同様の位置に在ること，例えば商人は商人，文人は文人に対してその感を同じうする。(3) 己れと目的を同じうすること。(4) 血統の近いものは父母を共にする兄弟から，同人種に属する一国民に至るまで多少の同情のないことはない。(5) 親子の間に存する本能。(6) 両性の間に存する本能。以上の六条件について説明を行った後，同情に二種あり，一つは自然精神に発するもの，他は倫理的同情と称されるものだとしてその各々に言及した。例えば甲が乙と共に喜び，また乙と共に悲しみ，必要のあるときは自己の快楽を犠牲にするような場合，これを自然的同情と見なし，また心理的に考えて感情的性質が最も少いのに理性的，実行的性質を有するのが倫理的同情である。これは外面的にみると他の種の同情と類似しているが，例えば自然の情からすれば当然恨むような場合に愛情を発し，敵を愛するが如きを倫理的同情と呼ぶのである。

愛情の第二の要素を元良は欽仰と名づけた。これは通常は相手を敬い仰いで慕うことを意味するが，元良はこ

れを一種の美妙的感情と見なし，すべて美麗なものを見て発する情，具体的には他人の容貌，品行，人となりなどを見て発する感情だと説明した。彼によると精神の活動はその種類甚だ多く，従て甲乙両人を比較する場合には一点を比較して両人の優劣を定めることは出来ず，結局甲なる人の精神活動の一部を乙なる人の精神活動の一部と比較することになる。そこで欽仰というのは自己と他人とを比較することから生ずるもので，自己より優れた身体と健康を有する人があれば，その人を欽仰するのは自然の情である。また知力や徳義の点で，或は勇気その他，自ら得たいと欲して未だ得られない点に於て自己より秀でた人があれば，その人を欽仰するの情が自ら発し，更にその人の行為に倣うようになるのも自然の結果であって，ここに愛情が発するのであるというのである。

同情と欽仰と共に愛情の要素と見なされる第三の固着は精神分析学の術語としての固定（又は固着）でもなければ，また学習心理学で，先行の学習又は行動が固定していて新しい学習を獲得できないような反応様式に対して名づけたものとも違った元良独特の用語である。彼によると固着とは人と人，或は人と物とが互に引き合う力であって人は誰れでも故郷に固着し，親の家に固着し，親は子に固着し，また両性は相固着するものとされているから，この意味での固着はむしろ後のソシオメトリーの用語としての牽引 (attraction) に近いものではないかと思われる。元良は以上の三要素につき一応の説明を行った上で，これら三つが共に存する場合，或はそのうちの一つ又は二つの存する場合のあることを述べ，更にこれらの要素の結合によって愛情の生ずる有様を両性，親子，朋友のそれぞれについて語り最後に愛国心の問題を採り上げた。彼のいわゆる愛国心は愛情の一種ではあるが，その感情の度は強くなく，範囲は広く，かつ他の感情のために動かされることが少い。愛国心では固着の要素が強く作用するが，同情と欽仰もその助けとなる。そして大体に見て愛国心では (1) 故郷に固着するの情が先入主となり，(2) 父母，親族，朋友に固着すること，(3) 故郷の山川風景は殊に慕わしいこと，(4) 言語の同一による人々の結合が大要素となること，(5) 風俗習慣の同一が同情を起させるに与って力あること，(6) 同一人種であること，(7) 爵位，財産，名誉及び国民からその人の受ける信用，以上六項の諸事実が強化的に作用するものと認められている。更に元良は心理学第23章倫理的感覚のうちに社会的及び国家的愛情という節を設けて次の如く論じた。[18]「他愛の観念の由りて来る所は外より強いてこれをなさしむるものに非ず，そのもとは自愛と同じく自然の情に基するものなりと雖も，その他愛の活動する範囲，一家族より親族，朋友遂に社会に拡るに従ひ，元の感情的性質は漸々減じて理性的の性質となる。然るにかの自愛の観念は常に感情的の性質を有するが故に，他愛の観念と競争するに於て一時これを圧し倒さんとするの勢力を有するものなり。然るに又他愛心は理性にその基礎を定むるものなるが故に，教育ある人に於ては他愛の観念は自愛の観念を能く制するを得るものなり。故に自愛心と他愛心は両者共に自然の人情に基するものなりと雖も，教育なき人は他愛を忘れて自愛に傾く習慣より遂にかの誤りたる観念，即ち自愛は悪し，他愛は善しとの思念を生ぜしむるに至りたるならん。然れども公平にこれを考ふるときは自愛と他愛とは共に人情に基するものにして，又存すべきものなり。而してなおその上に位する情あり，社会的及び国家的愛情これなり。これもとより他愛心より発達したるものなりと雖も，社会のため又は国家のために自己と他人の区別なくこれを愛し，以て社会の繁栄を計るは即ち理性に照されたる良心の働きにして自愛心及び他愛心より区別したる一種の愛情と云ふを得るものなり」と。

4. 社会的感覚論

元良の心理学のうちで，社会心理学上最も注目に価するのは，その第16章の社会的感覚についての論述である。けれども彼のいわゆる社会的感覚は社会心とか社会的精神とでも云える性質のものである。彼の主張によると人間固有の情としての愛情は，それの発する場合，強弱の差があり，その最も強いのは個人対個人に於てであって，愛する人の数が増加するにつれてその強さが漸少すると共に，また一種の感覚を生じる。先に述べた彼のいわゆる愛国心の如きはそれであって，その性質は人の強い愛情から生じる快楽とは類を異にするけれども，一種格段な快楽を与えるものと解されている。そしてこの快楽を広く押し及ぼして一種族或は一国民に応用するときは一種の社会的感覚なるものを生ずる。かく論じて元良は[19]「社会の特性」について次の如く説明した。「社会的感覚は一社会をなしたる人民中には必ず存するものにして，英人には英人の感覚あり，(中略) 日本人には日本人の感覚あり，俗に所謂大和魂なるもの即ちこれなり。斯くの如き感覚の存在するは決して偶然のことに非ず。これ人の奥妙なる性質にして心理学者の研究を免かれざる所なり。社会的感覚は愛国心とは少しくその趣きを異にするが如し。蓋し愛国心とは外国に対して自国を思ふ

情なりと雖も，社会的感覚は必ずしも外国に対したるときのみならず，内国人互に交際すると雖も現はるるものにして，その国の風俗習慣の基礎たるものなり。一個人に各特有性あり，その特有性によって各人の挙動にまた種々の差異を生ず，短気なる人あり，(中略)物事に精密なる人あり，蓋しこれらはその人の精神の特有性が身体に現はれ出でたるものなり。これと同じく社会的感覚なるものは一社会，或は一国家の特有性なり，而してこの感覚はもとより一個人の亡ぶると共に亡ぶるものに非ず，社会存在せし以来漸々に発達したるものなり，今日に於て存するものはその発達の結果なるが故に，また今後も我等の死する後永く社会と共に存在するものなり」と。元良はここで社会的感覚についての実在論と唯名論とでも称しうる問題に触れて次の如く説いた。「この社会的感覚なるものが人民の心を離れて存在するものなるや，或は又各人の精神中にある感覚より抽象したる総名なるや。或心理学者の説によれば一種族には必ず種族精神なるものあり，これは一個人の精神外に存するものとして，種族と共に発達し，又その種族の存在する間永く存在するものなりという。又社会の活動は時代の経過すると共に変遷するものにして，その時々の時の精神なるものの存在することを主張する人あり，又他の心理学者の説によれば斯の如き精神は一個人を離れて存在するものに非ず，唯一個人の簇り集りたるものを指したる抽象の総名に過ぎずとするものなり。これらの説は即ち両極端なりと云ふべし。一個人を離れて種族魂の存することなし，また種族魂或は時の精神，或は社会的感覚の如きは唯抽象的総名にもあらず，左にその性質を説明せん。ここに二人の朋友ありと仮定せんにこの二人は互に相愛すること深し。然れどもその二人の未だ逢はざりしときにありては快楽を覚ゆることなし。相逢うてはじめて前期に経験せざりし所の快楽を覚ゆるに至れり。ここに於てその愛情は二人の精神中にあり，又それより来る所の快楽も二人の精神中にあるなり。然りと雖も今かく相愛する所の朋友互に別れ，また再び逢ふことなきに於ては，たとい彼等の愛情は幾分かは存すると雖も快楽を感ずること漸々減少して前と同じ快楽を永久に続くる能はざるは自然の勢なりというべし。さればこの愛情は二人の精神外に存するものに非ずと雖も，亦二人の精神の現象より抽象したる総名にも非ず。即ち甲と乙が互に一つの格段なる関係，互に相接近することにありて，その愛情を惹き起すものなれば，愛情は一個人の精神の性質と，その甲乙格段なる関係とに基したる一種の感覚なり。故に愛情は甲の精神と乙の精神の中にのみ存するものに非ずして，甲と乙とのかの格段なる関係に存するものなりというを得べし。例えば火の燃ゆるは酸素のみの性質に非ず，また水素の性質のみにも非ず。酸素と水素と相合する格段の関係に基くものなり。(中略)これと同じく種族魂或は社会的感覚なるものはもとより一個人の精神中に存するものなりと雖も，これに加ふるに一個人互に相集り，且つ彼等が社会を組織することによりて始めて彼の種族魂或は社会的感覚を生ずるを得るものなり」と。

以上の如く社会的感覚の所在を人々の結ぶ格段の関係に求めた元良はまた社会的感覚の要素を分析して，(1)遺伝によって多少性質の相似していること，(2)同一の言語を有すること，(3)思想を交換するの密であることの三つを挙げた。もちろん一社会は必ずしも同種族のみから成るものではないし，又一社会中必ずしも同じ言語を話すとは限らない。けれども元良によると，一社会は互に思想を交換することの密であることを要し，また同じ政府の存すること，或は同じ敵を有することなども要素となるとされている。特には日本国の如きは一種族が一社会をなし，同じ言語を話し，また一つの法律的社会としての国家をなすものであるから，社会的感覚が非常に発達して，いわゆる大和魂を生じたのも決して偶然ではないと考えられた。これによってもわかるように，元良のいわゆる社会的感覚は種族的感覚，国家的感覚，大和魂などと殆ど同意に用いられ，またその性質は種族の性質，社会の組織などに起因するものと見なされた。彼が社会の風俗，習慣，文学，国家の組織などを以て社会的感覚の客観的表現となし，またこれらによって社会的感覚を養成することもできると主張したのは以上の立論の結果である。

社会的精神という言葉を用いずに特に社会的感覚と称する一種の感覚を認め，それを重視した元良は音楽が聴神経，絵画が視神経によって，それぞれ美的感覚を生ぜしめられることに連関して，社会的感覚を通ずる所の外官の存否を一応問題にして考えた末，結局社会的感覚にはこれを通ずる外官があるわけではなく，その性質は甚だ複雑であって，種々な感覚や思想などの相合して始めて生ずるものだとなし，しかもそれは音楽や絵画などと同じく，人の高尚な美術的及び倫理的感覚に基くものであって，社会の組織がその社会的欲望を満たすとき精神中に大きな快楽を与え，然らざるときは大いに不愉快の感覚を生ぜしめると説いて，ここでも彼の主張した苦楽の原理に基く立論をなした。

元良はその著心理学の第16章で倫理の原理，第23章で

倫理的感覚の問題を扱ったが，それらの論述のなかにも社会心理学的に見て注目すべき見解を示した。次にその主なものを要約的に述べてみよう。元良は倫理の原理に(1) 一個人を以て倫理の基本とするもの，(2) 社会を以てその基本とするもの，この二説のあることを指摘した。(1)の説によると人の生存する最も高尚な目的は一個人の精神能力を充分に発達させ，各能力が互に調和して円満な活動をなし，従てその人を完全なものとすることである。元良はこの説を以て誤謬とは云えないかも知れないが，ただ倫理の一部に過ぎない，なぜならば人は一個人で完全になることはできないからであると説いた。彼によると元来人の精神は多くの観念の集合で，単に意識中に現われるものだけでなく，互に結合し，自覚を中心として秩序的に運動するものである。各観念を国家の人民に，また結合的性質，即ち自覚を政府に比較した元良はこの比喩を利用して，社会の組織の形状はこの精神中の構造に基くものと考えた。国家の組織は，これを組織する個人の精神の性質によって定まり，社会は人民相互の長短を補う機関となる。人々が相集れば各々その性質を異にし，甲の長所は乙の短所であり，乙の長ずる所は丙の短所であるような場合がある。そこで人々が互に相補うのでなければ完全な社会を組織することができない。一国を組織する人民は互に補うて始めて益々完全に近づくことができる。故に個人の精神が如何に発達しても，一個人で為しうることは甚だ小部分に過ぎず，人々相集って国家を組織し，国家生命を造り，従て国家精神を造るとき始めて人間存在の目的を達しうるのである。それ故国家の調和した円満な活動こそは倫理の最上目的なのである。

以上が倫理の原理を社会に求めた元良の理論であるが，彼は社会と国家とを多くの場合同一視してその論を進めた。彼によると社会と国家は有機物であって個人はこれに二様の関係をもつ。(1) 個人が社会を組織する。(2) 個人は社会を利用する。この二つのうち第一の関係については，前に述べたように，社会の形状は個人の精神の形状に基くものだと説き，第二の関係については次の如くやや詳しく論及した。即ち肉体がなければ人の精神は存在できず，人の精神はこの肉体に附属する機関を利用して内なる欲望を満足させようとする。けれども肉体の機関は甚不充分であるから，いろいろな器械を以てその不足を補はんとする。乗車を以て足の不足を，蒸気機関を以て運動の不足を，眼鏡を以て目の不足を補うが如きは何れも以上の理由に基く。けれども蒸気機関の人間に利益を与えることが如何に大きいとは云っても，それはただ人間の欲望の一部分を満足させるだけである。ところが国家という機関はただ我々を外敵から保護するばかりではなく，人間に備わる諸性質の完全な発達を遂げさせるために必要で，欠くべからざる大器械である。それ故この大器械が完全であるときは我等一個人の生活も亦完全となり，そうでないときは我等の生活も亦不完全とならざるを得ない。このような理論が元良の主張した「社会から来る苦楽の理」であって，個人の精神生活といえども，この社会の組織から来る苦楽の関係を免かれないと説く。そして結論として元良は次の如く主張した。[20]「一説によれば社会的生活は客観的にして，精神的生活は主観的なりと云ふ。それ或は然らん。然りと雖も主観的生活は常に客観的生活と直接に相関して形状を共にし，浮沈を共にするが故に，両者を併行せしめて学ばざれば我等その性質を了解する能はざるなり。故に心理学上の点より国家の現象を学び，又国家学上の点より心理を研究するときは互に相助け，その性質を了解するを易からしむるものなり」と。この見解は元良が個人心理学を越えて国家，即ち社会の心理学の必要を暗示したものと見て差支ないと思う。

5. 目的論的見解

元良はその心理学の研究に於て何よりも因果律と勢力保存律とに重点を置いて出発したのであるが，後にはその苦楽の原理に於ても窺われるように，目的論を加えて社会現象の説明を進展させるに至った。彼のこの傾向は1894年（明治27）1月の哲学雑誌第83号に載せた物理界と人事界との比論という[21]論文に最もよく示されている。以下その要旨を記してみよう。人知を離れて天然現象を考える場合，そこには自ら原因結果の大法則があって，これに秩序を加えているようである。しかもその法則は尨雑なる天然現象を統一しているものの如くではあるが，それは未だ確知することができない。仮りにこの大法則が天然を統一するものだとしても，その統一は不完全である。なぜならば原因は結果の上に影響を及ぼすけれども，結果は原因の上に影響を及ぼすことができないからである。従てこのようなものは統一と名づけ難い。科学者は天然現象を研究し，そのうちに法則の存することを発見し，これを実験的法則と称するが，これは哲学者のいわゆる真理に等しいものではない。また悉く天然現象を総括するものでもなく，ただ一部分の現象をとって総括するに過ぎない。しかも科学が進歩するに従い，前に法則と思ったものも亦大いにその趣きを変えることもある。このように考えれば我等が絶対的懐疑に陥

るのは物理界と人事界と異る所がない。物理界を人事界から離して考えるときは茫漠として定まりないけれども，物理界に人心の現象を和合させるときは，それは人事界となる。物理界の懐疑は救うことができないとしても，人事界に於てはそうではない。人事界では因果の法則以外に，別の目的と手段の法則がある。故に人事界の現象はその活動原因のために動かされるだけでなく，またその活動から生ずる結果も更に人事界に適合すべきである。例えば水が熱気を受けて膨張するのは全く因果法則によるのであるが，蒸気機関中に水を熱し，これを適当な機械に注入して，その運転を起させるときは人事の用を達することを目的としている。進んで政治，法律，教育などの複雑な現象に至っては農工商の現象よりも，なお多くの精神現象と相混淆しているとはいえ，これを要するにいかなる精神的のものでも，物質現象が同伴して外部に現われることを常とする。そしてその物質の現象は必ず因果の法則によらなければならないのに，更に人事の目的に適合することが要求される。このように見てくると物理界の現象と人事界の現象とは皆等しく物質の現象となる。そして物理界では因果法則があって不完全な統一をなし，人事界ではその上に目的と手段の法則があって，単に原因が結果の上に影響を及ぼすばかりではなく，何等かの目的を定め，物質の現象をしてその目的に適合させることを要する。このようにして過去，現在，未来の完全な統一をなすことができる。

以上の論述で明かなように，元良は物理界ではただ因果律だけが行われて不完全な統一をなしているのに反して，人事界では因果律の外に目的律があり，過，現，未を通じて比較的に完全な統一をなすと説き，以て物理界と人事界との特徴を示したのである。彼のいわゆる人事界を以て社会と見なし，社会に於ける目的律の作用を研究することは，今日の社会心理学にとっても重要な課題であると思う。

(1968・1・10)

〔注〕

1) 高橋　徹外　社会心理学の形成，1965，培風館 P. 476 f. 参照。年報社会心理学　第8号，1967，P. 262 参照。
2) 元良博士と現代の心理学，1914，P. 72.
3) 前掲書 P. 114.
4) 前掲書 P. 77.
5) 前掲書 P. 114.
6) 前掲書 P. 26.
7) 前掲書 P. 30.
8) 徳谷豊之助 社会心理学，1906，誠元堂書店 P. 1-2. 佐原六郎　社会心理学，1956，慶応通信，序 P. 1 参照。
9) 元良勇次郎　心理学，1890，金港堂 P. 2-3.
10) 元良，前掲書 P. 7-8.
11) 元良，前掲書 P. 13-17.
12) 元良，前掲書 P. 16.
13) 元良，前掲書 P. 14.
14) G. W. Allports, The Historical Background of Modern Social Psychology, Handbook of Social Psychology, Vol. I. Ed by G. Lindzey, 1954. P. 9.
15) 元良，前掲書 P. 135.
16) 元良，前掲書 P. 141-2.
17) 元良，前掲書 P. 180 f.
18) 元良，前掲書 P. 267 f.
19) 元良，前掲書 P. 188.
20) 元良，前掲書 P. 196.
21) 前掲，元良博士と現代の心理学 P. 85-6 にその一部が再録されている。

明治，大正，昭和前期の社会心理学関係単行本目録

明治時代（1868～1912）

(a) 日本社会心理学の萌芽
- 1890 元良勇次郎　心理学（原理，心理学と社会学，第16章 社会的感覚）

(b) 社会学的社会心理学の出発
- 1900 ギデイングス・遠藤隆吉　社会学
- 1906 徳谷豊之助　社会心理学
- 1909 遠藤隆吉　社会心理と教育
- 1909 小林郁　社会心理学
- 1910 小林郁　社会心理研究
- 1912 樋口秀雄　社会学十回講義

(c) 群　集
- 1908 谷本富　群集心理の新研究
- 1914 ル・ボン・前田長太　群集心理
- 1914 ル・ボン・前田長太　革命の心理

(d) 民族，国民
- 1890 外山正一と民族心理学（松本亦太郎，心理学史による）
- 1909 ル・ボン・前田長太　民族発展の心理
- 1909 バーカー・村井知至　仏国人の仏国

大正時代（1912～1926）

(a) 心理学的社会心理学の出発
- 1914 速水滉　現代心理学（第6章 社会心理学と民族心理学）
- 1923 松本亦太郎　心理学講話（第3篇 社会的精神作用）
- 1925 マクドーガル・宮崎市八　社会心理学概論

(b) 社会学的社会心理学
- 1913 ロッス・高橋正熊　社会統制論
- 1913 ミヘルス・森孝三　政党の社会学

1916 マクスウェル・大日本文明協会　現代の社会心理
1917 ロッス・高部勝太郎　社会心理学
1920 米田庄太郎　経済心理の研究
1921 クーレー・納武律　社会と我(人間性と社会秩序)
1921 エルウード・佐野勝也　社会心理学
1924 タルド・風早八十二　模倣の法則
1924 エルウード・宮崎市八　心理学的社会学

(c) 民族，国民
1912 フイエ・大日本文明協会 欧州諸国民の心理
1915 遠藤隆吉　社会学近世の問題（日本の心理学，日本の民族心理学，日本人の性情）
1917 米田庄太郎　民族心理講話
1921 高峰博　個性学（国民性）
1921 入谷智定　集団心理学
1922 マクドーガル・宮沢末男　集団心理
1924 桑田芳蔵　ヴントの民族心理学

(d) 群　集
1916 クリステンゼン・佐久間秀雄　群集と政治
1921 葛西又次郎　群集心理講義

(e) 犯　罪
1916 寺田精一　グロース・犯罪心理学
1926 寺田精一　現代人の生活

(f) 社会諸事象
1919 米田庄太郎　現代人心理と現代文明
1921 米田庄太郎　現代文化人の心理
1921 米田庄太郎　現代知識階級運動と成金とデモクラシー
1921 寺田精一　現代人の生活

昭和前期（1926～1944）

(a) 社会学的社会心理学
1926 福島隆　社会心理学
1926 市村今朝蔵　社会心理学
1933 ギンスバーグ・小面孝治　社会心理学

(b) 心理学的社会心理学
1929 久保良英　輓近の心理学
1929 波多野完治　現代心理学(上)
1942 桑田芳蔵　社会心理学（現代心理学全集II）
1942 キンボールヤング・米林富男　社会心理学入門
1944 メーデ・瀬川良夫　集団の心理

(c) 群　集
1928 タルド・赤坂静也　与論と群集
1929 新明正道　群集社会学
1930 大石兵太郎　群集心理学

(d) 性格，民族，国民
1929 松本亦太郎　素質の心理
1938 ヴント・平野義太郎　民族心理より見たる政治的社会
1940 デュルクハイム・橋本文夫 民族性と世界観
1940 シュプランガー・大日向勝　喰代 驥　民族性格学
1941 遠藤隆吉　性格学
1941 田中寛一　日本民族の力
1941 高良武久　性格学（改訂増補）
1941 大場千秋　民族心理学
1943 戸川行男　民族の意志
1943 民族の心理（現代心理学V）

(e) 宣　伝
1942 戸沢鉄男　宣伝概論
1943 米山桂三　思想闘争と宣伝
1944 戸沢鉄男　宣伝戦の史実と理論
1944 ドウーブ・春日克夫　宣伝心理学